報　告

作業療法士と歯科衛生士を目指す学生の高齢者に対する意識調査
ー 祖父母との同居経験の有無から ー

川上永子[1)]　巽　絵理[1)]　濵元一美[2)]
1）四條畷学園大学
2）関西女子短期大学

キーワード
高齢者　作業療法学生　歯科衛生学生

要　旨

近年の学生と関わるなかで，人と関わる経験を積み重ねていないと感じることがある．現に，入学後に初めて異年齢交流を経験する学生も多く存在する．また，現代の核家族化などにより高齢者とかかわる経験が非常に乏しくなっている．リハビリの専門職である作業療法士や口腔ケアの専門職である歯科衛生士を目指す学生としては，高齢社会の現状を把握し高齢者に対応できる人材となる必要がある．今回，学生たちの高齢社会に対する意識を知るために高齢者との「交流経験」と「交流に対する今後の意識」といった具体的な交流経験を含んだ質問紙によるアンケート調査を行なった．その結果，同居の有無や作業療法学生と歯科衛生学生に関係はなく，高齢者との具体的な交流内容により経験や意識に違いがあることが分かった．

はじめに

近年わが国では少子高齢化が急速に進み，1970年に65歳以上の高齢者（以下，高齢者）は７％を超え，2004年には19.5％に上昇し，いわゆる高齢社会に突入した．その一方で，高齢者のいる世帯，いわゆる三世代世帯は1980年の50％を境に減少し始め，2003年には24％と半減している．つまり，現在20歳前後の若者が児童期や学童期の頃は核家族化が進み，祖父母との同居を経験していることが少ないと考えられる．

高塚[1)]は1960年の高度経済成長以降において少子化，核家族化が進み，家庭内でも親子兄弟姉妹のなかでできていた当たり前のしつけや生活の仕方，人としてお互いを思いやって関わることなどが希薄になっていると述べている．さらには，一番身近であるはずの親とも関わりが薄く，親子の関わりが未熟になってきていると述べられている．また，地域において親以外の大人をはじめ，乳幼児や高齢者と関わることも極端に少なくなっている現状を指摘している．つまり現代の若者は，異年齢や様々な価値を持った人と身近に接する機会が少なく，様々な人との関わりの経験が乏しいといえるであろう．

医療専門職はあらゆる年齢の人を患者様として関わることになるが，近年の高齢者の急増によって，患者様となる高齢者も増加の一途をたどっている．また，医療のみならず介護をも必要とする高齢者の増大によって，介護保険の見直しが議論され予防給付が新たに加えられることとなった．なかでも，年齢に伴う機能低下の予防や諸疾患の後遺症への対応としてのリハビリテーション（以下，リハビリ）や口腔内の不備や嚥下に対する機能低下などへの対応としての口腔ケアに対するニーズがクローズアップされている．

勿論，専門職である作業療法士（以下，OT）や歯科衛生士（以下，DH）を目指し入学してくる学生達においても，先に述べた時代背景のなかで成長してきていることは例外ではなく，身近に高齢者が生活している状況で育ってきた学生は少ない．さらには筆者らの勤務する学校の学生において，「高齢者と話をしたこともない」という高齢者との交流経験が全くないといった学生が毎年数名はおり，実践を伴う臨床実習において初めて接す

るという学生も少なくはない．このような状況から，我々は現代社会の人間関係の希薄さを実感している．医療や介護の専門職というのは様々な人を対象とする職種であり，医療にかかる年代層から考えるとOTやDHが対象とする人は，高齢者が多いといえる．ゆえにOTもDHも学内実習や学内教育において高齢者と関わるということを視野に入れた教育がなされているも十分とはいえない．そこで今回，リハビリの専門職種としてOT，口腔ケアの専門職種としてDHを取り上げ，それぞれの専門職を目指す学生の高齢者に対する意識を考えてみることとした．また，祖父母との同居経験のある学生は高齢者との交流経験が多いのではないかということ，高齢者との交流に対する今後の意識も祖父母との同居経験のない学生に比べ高いのではないかと考えた．よって同居経験の有無をもとに，具体的な交流経験を含んだ質問紙によるアンケート調査を実施し，その結果に考察を加えたので報告する．

方　法

1．調査対象

A短期大学リハビリテーション学科作業療法専攻学生72名，B短期大学歯科衛生士学生100名．

2．調査内容

無記名による一斉アンケート調査とした．アンケート内容は嵯峨座[2)]による高齢者との交流経験を調査する際

表1　アンケート調査用紙

年齢：　　　歳　　　　性別：男・女

1．あなたの祖父または祖母との同居状態について教えてください
- ①　一緒に住んでいる
- ②　過去に1年未満一緒に住んだ経験がある
- ③　過去に1年以上一緒に住んだ経験がある
- ④　一緒に住んだ経験はないが、常（週に1回位）に行き来している
- ⑤　一緒に住んだ経験はないが、時々（月に1回位）に行き来している
- ⑥　一緒に住んだ経験はないが、稀（年に1・2回位）に行き来している
- ⑦　一緒に住んだ経験はなく、ほとんど接することもない
- ⑧　その他

2．日本は高齢者にとって住みやすいと思いますか？またその理由を答えてください

①　はい　　②　いいえ　　③　分からない

理由：

3．1）あなたは電車やバスでお年寄りに座席を譲ったことがありますか？

①　はい　　②　いいえ

あなたは今後、電車やバスでお年寄りに座席を譲ろうと思いますか？

①　はい　　②　いいえ

2）あなたは街でお年寄りの荷物を持ったことがありますか？

①　はい　　②　いいえ

あなたは今後、街でお年寄りの荷物を持とうと思いますか？

①　はい　　②　いいえ

3）あなたは街でお年寄りの手を引いたことがありますか？

①　はい　　②　いいえ

あなたは今後、街でお年寄りの手を引こうと思いますか？

①　はい　　②　いいえ

4．将来高齢者と関わった仕事をしたいと考えていますか？

①　はい　　②　いいえ

に用いられたなかから一部抜粋（表１）したものを使用した．

1）祖父母との同居経験の有無

2）高齢化社会に対する意識

3）高齢者との「具体的な交流経験」および「今後の高齢者との交流に対する意識」

4）仕事としての高齢者との関わりに対する意識

3．分析方法

祖父母との同居経験の有無から「OT学生の同居経験あり」「OT学生の同居経験なし」「DH学生の同居経験あり」「DH学生の同居経験なし」の４グループに分け，回答結果を比率で示す．

結　果

1．アンケートの回答状況

アンケートの回収率は100％であり，有効回答枚数172通（OT学生72名、DH学生100名）であった．

2．学生の基本情報

OT学生の平均年齢は21.4歳（SD=3.00），DH学生の平均年齢は19.8歳（SD=0.64）であった．また男女比は，OT学生は男性10名，女性62名，DH学生女性100名であった．

3．アンケート結果から得られた学生の「高齢者との交流経験」及び「高齢者との交流に対する今後の意識」

1）祖父母との同居経験の有無

一緒に住んだ経験がある学生はOT学生36名（50％）で，DH学生46名（46％）であった．また，一緒に住んでいない学生はOT学生36名（50％）で，DH学生54（54％）名であった．

2）高齢化社会に対する意識（表２）

日本は高齢者にとって住みやすいと思うかという質問に対して「OT学生の同居経験あり」は８％が①はいと答えており，理由については「バリアフリー化が進んでいる」「介護保険等のサービスや制度が充実してきた」と答えている．②いいえは53％であり，その理由は「公共交通機関や道路などの段差も含めたバリアフリー化が十分といえない」「介護保険等の制度やサービスが増えてはいるがまだまだ不十分である」「一人暮らしの場合に近所づきあいがないと何かあったとき困る」「世の中便利になってきているが若者に合わせており高齢者へはあまり配慮されていない」といった理由が多かった．③分からないが39％であり，その理由は「制度などは整ってきているが，これでいいのかが分からない」「地域差や個人差が大きいと思うから分からない」が多かった．

「OT学生の同居経験なし」は３％が①はいと答えており，その理由は「施設やサービスが増えているから」であった．②いいえは61％であり，「OT学生の同居経験あり」とほぼ同様の理由が多かったが，「子供が遠方にいると何かあったときに困る」や「高齢者を大切にする若者が少ない」といった理由もあった．③分からないは36％であり，「バリアフリー化も含め地域差が大きい」という意見が大半であった．１名ではあるが「接することがほとんどないから分からない」という理由もあった．

「DH学生の同居経験あり」は22％が①はいと答えており，その理由は「OT学生の同居経験あり」と同じ理由であった．②いいえと答えたのは43％であり，「バリアフリーが十分でない」「若者中心の環境」「制度が不十分」「高齢者への思いやりがない」といった理由があげられた．③分からないは35％であり，「バリアフリーも場所により差がある」という理由であった．

表２　高齢社会に対する意識：
「日本は高齢者にとって住みやすいと思いますか」の質問に対する回答

OT学生＝72
DH学生＝100

	OT学生 同居経験あり	OT学生 同居経験なり	DH学生 同居経験あり	DH学生 同居経験なし
① 日本は高齢者にとって住みやすいと思う	8	3	22	13
② 日本は高齢者にとって住みにくいと思う	5	61	43	50
③ わからない	39	36	35	37

単位：％

「DH学生の同居経験なし」は13％が①はいと答えており，その理由は「DH学生の同居経験あり」と同じ理由に加え，「高齢者問題として取り上げられており，高齢者への配慮がなされている」という理由があった．②いいえと答えたのは50％であり，「バリアフリーが十分でない」「若者中心の環境」「制度が不十分」「高齢者への思いやりがない」といった理由に加え，「高齢者の一人暮らしが増えてきている」との意見があった．③分からないは37％であり，「バリアフリーも場所により差がある」という意見に加え「自分が高齢者でないから分からない」といった意見が多かった．

3）高齢者との「具体的な交流経験」および「今後の高齢者との交流に対する意識」

①電車やバスでお年寄りに座席を譲ったことがあるか、今後譲ろうと思うかについて（表3）

「OT学生の同居経験あり」は92％が座席を譲った経験があり，今後譲ろうと思うと答えたのは97％であった．「OT学生の同居経験なし」は譲ったことがあるのは89％であり，今後譲ろうと思うのは92％であった．これに対し，「DH学生の同居経験あり」は87％が座席を譲った経験があり，今後譲ろうと思うのは99％であった．「DH学生の同居経験なし」は譲った経験ありが83％，今後譲ろうと思うのは94％であった．

②街でお年寄りの荷物を持ったことがあるか、今後持とうと思うかについて（表4）

「OT学生の同居経験あり」は33％が荷物を持った経験があり，今後荷物を持とうと思うと答えたのは75％であった．「OT学生の同居経験なし」は荷物を持ったことがあるのは31％であり，今後持とうと思うのは69％

表3 「電車やバスでお年寄りに席を譲ったことがありますか」および「今後，電車やバスでお年寄りに席を譲ろうと思いますか」の質問に対する回答

OT学生＝72
DH学生＝100

	OT学生 同居経験あり	OT学生 同居経験なり	DH学生 同居経験あり	DH学生 同居経験なし
譲った経験あり	9	89	87	83
譲った経験なし	8	11	13	17
今後，譲ろうと思う	97	92	99	94
今後，譲ろうと思わない	3	8	1	6

単位：％

表4 「街でお年寄りの荷物を持った経験がありますか」および「今後，街でお年寄りの荷物を持とうと思いますか」の質問に対する回答

OT学生＝72
DH学生＝100

	OT学生 同居経験あり	OT学生 同居経験なり	DH学生 同居経験あり	DH学生 同居経験なし
持った経験あり	3	31	2	9
持った経験なし	6	69	98	91
今後，持とうと思う	75	69	59	65
今後，持とうと思わない	25	31	41	33

単位：％

であった．これに対し，「DH学生の同居経験あり」は２％が荷物を持った経験があり，今後荷物を持とうと思うのは59％であった．「DH学生の同居経験なし」は荷物を持った経験ありが９％，今後持とうと思うのは65％であった．

③街でお年寄りの手を引いたことがあるか、今後実践しようと思うかについて（表５）

「OT学生の同居経験あり」は28％が手を引いた経験があり，今後手を引こうと思うと答えたのは86％であった．「OT学生の同居経験なし」は手を引いたことがあるのは14％であり，今後手を引こうと思うのは64％であった．これに対し，「DH学生の同居経験あり」は９％が手を引いた経験があり，今後手を引こうと思うのは61％であった．「DH学生の同居経験なし」は手を引いた経験ありが19％，今後手を引こうと思うのは70％であった．

４）将来高齢者と関わった仕事をしたいと考えているかについて（表６）

「OT学生の同居経験あり」は69％が考えており，「OT学生の同居経験なし」では92％であった．これに対し，「DH学生の同居経験あり」は54％が考えており，「DH学生の同居経験なし」は41％であった．

考　察

１．高齢化社会に対する意識について

日本は高齢者にとって住みやすいと思うかについての質問に対し，住みやすいと答えているのは「OT学生の同居経験あり」は８％，「OT学生の同居経験なし」は３％，「DH学生の同居経験あり」が22％，「DH学生の同居経験なし」が13％に対しとなっており，OT学生の方が同居経験あり，なしともに日本は住みにくいと考えていることが分かる．その理由として「道路や公共施設のバリアフリー化が十分である」と捉える学生も「道路や公共施設のバリアフリー化が不十分である」と捉える学生もいる．また同様に「介護保険等の制度が十分である」に対し「介護保険等の制度が不十分である」と答えているように捉え方が両極化している．つまり，バリア

表５　「街でお年寄りの手を引いた経験がありますか」および「今後，街でお年寄りの手を引こうと思いますか」の質問に対する回答

OT学生＝72
DH学生＝100

	OT学生 同居経験あり	OT学生 同居経験なり	DH学生 同居経験あり	DH学生 同居経験なし
手を引いた経験あり	2	14	9	19
手を引いた経験なし	7	86	91	81
今後，手を引こうと思う	86	64	61	70
今後，手を引こう思わない	25	31	41	33

単位：％

表６　「将来高齢者と関わった仕事をしたいと考えていますか」の質問に対する回答

OT学生＝72
DH学生＝100

	OT学生 同居経験あり	OT学生 同居経験なり	DH学生 同居経験あり	DH学生 同居経験なし
考えている	6	92	54	41
考えていない	3	8	47	59

単位：％

フリーや介護保険等のことは知っているもそれらの情報をどのように捉えるかは個人の知識や経験によりかなりの差異が認められる．これは現代のテレビなどの情報が溢れているなかで十分に理解されないまま個人の主観で捉えられていることが考えられる．また，分からないと答えたのはどちらの学生も約35％あった．この理由としてもやはりバリアフリーや介護保険といった理由があがっており，加えて個人やその地域によって違いがあるから分からないという理由である．ただし，今回OT学生の方は住みやすいとしたのは非常に少なかった．この結果から考えるとDH学生と同様に情報量の差はないも，その捉え方に差が生じているといえる．その理由としては学内教育においてOTでは必ずしも現状の公共施設等のバリアフリー化が十分であるとは伝えていないことの影響もあるのではないかと思われる．また，学生自身も地域のバリアフリーや介護保険制度などに対して意識が高いということも考えられる．その他，住みにくいと考える理由に「若者の意識」があげられている．具体的には「高齢者への思いやりがない」,「子供の同居が少ない」などがあげられており，若者自身が高齢者との関わりの希薄さを感じているといえる．また，DH学生の分からないと答える理由に「自分が高齢者でないから分からない」というのがあった．高塚[3]はさまざまな人間関係体験そのものがないとか少なく，小・中・高校生と高齢者との関わりが全くないとか少ない状況にあると述べている．このような状況から考えても現代の若者の特徴ともいえる「他者の立場になって考える」「相手の身になる」ということができないといったコミュニケーション能力の欠如が如実に現れた結果といえる．

2．高齢者との「具体的な交流経験」および「今後の高齢者との交流に対する意識」について

1）電車やバスでお年寄りに座席を譲ったことがあるか，今後実践しようと思うか

座席を譲った経験があるのは「OT学生の同居経験あり」は92％,「OT学生の同居経験なし」は89％,「DH学生の同居経験あり」は87％,「DH学生の同居経験なし」は83％と比較的高い結果が出ているも，濱元ら[4]によると韓国の大学生においては99％が座席を譲った経験があると答えており，同報告の日本の学生は64％にすぎなかったという結果を示している．またこの差について韓国の若年世代は高齢化への関心が強く，敬老や老親文化が受け継がれており，これに対し日本は高齢者に配慮する意識に欠けると報告している．今回の結果を韓国と比較するとやはり濱元と同様の結果であるといえる．ただし，OT学生とDH学生を比較するとOT学生の方が同居経験あり・なしともに高いのはOT学生を目指す学生は入学以前から高齢者との関わりを意識していることが伺える．また，今後譲ろうと思うと答えたのは「OT学生の同居経験あり」が97％,「OT学生の同居経験なし」は92％,「DH学生の同居経験あり」は99％,「OH学生の同居経験なし」は94％であった．座席を譲った経験と今後の意識を比較するとOT学生，DH学生ともに高くなっている．座席を譲るということの意識は高いといえる．このように意識はあるも行動に移せないことについては，日本における高齢者に対する教育の不十分さ，同居率の低下や高齢者と関わる機会の絶対的不足といった社会的背景の影響が考えられる．

2）街でお年寄りの荷物を持ったことがあるか，今後実践しようと思うか

荷物を持った経験があるのは「OT学生の同居経験あり」が33％,「OT学生の同居経験なし」は31％,「DH学生の同居経験あり」は2％,「DH学生の同居経験なし」は9％であった．今後荷物を持とうと思うと答えたのは「OT学生の同居経験あり」が75％,「OT学生の同居経験なし」は69％,「DH学生の同居経験あり」は59％,「DH学生の同居経験なし」は65％であった．OT学生とDH学生を比較すると同居経験あり・なしに関係なく，また今後の意識に関してもOT学生の方が高い結果となっている．これは座席を譲るということに比べ更に関わりの程度が深くなることからどちらの場合も経験者は少ない事がいえる．ただし，今後に対する意識についてはどちらも高くはなっているが「座席を譲る」ほどの意識はないといえる．このように声をかけ，荷物を持つといった行為はより関わりの深い行動であり，高齢者への積極的な関わりは現代の学生には非常に難しいこととなっていることが伺える．

3）街でお年寄りの手を引いたことがあるか，今後実践しようと思うか

お年寄りの手を引いた経験のあるのは「OT学生の同居経験あり」は28％,「OT学生の同居経験なし」は14％,「DH学生の同居経験あり」は9％,「DH学生の同居経験なし」は19％であった．また，今後手を引こうと思うと答えたのは「OT学生の同居経験あり」は

86％，「OT学生の同居経験なし」は64％，「DH学生の同居経験あり」は61％，「DH学生の同居経験なし」は70％であった．OT学生の場合同居経験がある方が手を引いた経験も今後の意識も高く，DH学生に関しては同居経験なしの方が手を引いた経験も今後の意識も高くなっている．同居の有無には関係なくお年寄りの手を引くといったまず，その状況を判断し，声をかけ，実行する，加えて実行中の対応方法など様々なコミュニケーション能力が要求される行為に関しては実践できないということが明らかとなった．この手を引くという行為は荷物を持つという行為と同じであり，どちらも現代の学生にとっては他者の状況に応じて対応するといった非常に難しい対人交流といえる．

3．将来高齢者と関わった仕事をしたいと考えているか

将来高齢者と関わった仕事がしたいと考えているのは「OT学生の同居経験あり」は69％，「OT学生の同居経験なし」は92％，「DH学生の同居経験あり」は54％，「DH学生の同居経験なし」は41％であった．OT学生とDH学生と比べてOT学生の比率が高い結果になっている．これはOT学生においては職業選択の時点で高齢者と関わる仕事であるという認識を持っている，かつ高齢者と関わる仕事がしたいと望んで職業選択している事が考えられる．これに対し，DH学生は一般健常者という認識はあっても高齢者という認識は希薄であるといえる．また，学内教育や臨床実習についてもOT学生は高齢者が対象であることは自明のごとく取り上げられているが，DH教育では高齢者教育は極一部に留まるということが大きく影響しているのではないかと考えられる．

4．同居経験有無による高齢者との交流経験の違い

今回，同居経験の有無が高齢者に対する関わりの経験や今後に対する意識に影響があると考えたが，結果は同居の有無による大きな違いはなかった．ただし，OT学生とDH学生の比較からは将来高齢者と関わる仕事をしていきたいかということについてのみ違いが見られた．この結果から考えられることは同居経験にかかわらず，この世代の特徴として座席を譲ることと，荷物を持つ，手を引く，といった他者へのより深い関わりである行為や意識の希薄さが著明に現れているといえる．現代の子供は他者の状況を見て，心で感じ，行動に移すことが苦手であるといわれており他者とのコミュニケーション能力も非常に低下していることの現れであるといえる．

まとめ

今回OT学生とDH学生に高齢者との交流経験および今後の高齢者に対する交流意識についてアンケート調査を行なった．その際，同居経験の有無による影響およびOTとDH教育の違いを検討した．

1．OT，DHともに同居経験の有無には関係なく，高齢者との具体的な交流経験により違いが生じることが分かった．
2．高齢者との具体的な交流経験を問うたアンケート結果では「座席を譲った経験」も「今後座席を譲ろうと思う」という意識も高かった．
3．高齢者との具体的な交流経験を問うたアンケート結果では「荷物を持つ」「手を引く」といった内容は経験および今後の意識ともに低かった．
4．高齢社会に対する意識と将来高齢者と関わる仕事を選択するかについてはOT学生とDH学生で違いがあり，OT学生の方が高齢化社会に対するバリアフリー化や社会制度に対して厳しい視点で捉えるとともに，将来的に高齢者と関わっていきたいと考える者が多かった．

謝　辞

本研究において，調査の目的を理解し協力して頂いた関西女子短期大学学生および四條畷学園短期大学学生諸氏に感謝いたします．

文　献

1）高塚人志：いのちにふれる授業－鳥取・赤崎高校の取り組み－．小学館，2005, pp, 69.
2）嵯峨座晴夫：少子高齢社会と子どもたち－児童・生徒の高齢化問題に対する意識調査を中心に－．中央法規，pp76.
3）高塚人志：17歳が変わる！－人との関わり方を学ぶゲームと人間関係体験－．小学館，2001, pp23.
4）濵元一美，柴谷貴子，祖父江鎮雄：日本と韓国における高齢化の一考察－調査報告を交えて－．関西女子短期大学紀要第14号：27-37, 2005.

Attitudes toward the elderly among occupational therapy students and dental hygiene students
— Living with grandparents or not —

Eiko Kawakami [1)]　Eri Tatsumi [1)]　Kazumi Hamamoto [2)]

1) Shijonawate Gakuen University　2) Kansai Girl Junior Colleges

Key words

elderly, occupational therapy students, dental hygiene students

Abstract

In recent interactions with students, the feeling has emerged that today's students have not accumulated experiences of social contact with others. In fact, it has become clear that many students do not experience interaction with individuals outside their own age group until they have completed their education. However, students pursuing a career as an occupational therapist or dental hygienist are expected to develop the ability to understand the condition of elderly individuals and respond appropriately and adequately. Although students in such programs receive appropriate practical training and education, further training is obviously required. In order to identify students' attitudes towards the elderly, a study was conducted using a questionnaire containing items regarding specific social interactions, such as the experience of interacting with elderly individuals, and attitudes about meeting elderly individuals in the future. The results indicated that regardless of whether students are living with their grandparents or not, or whether students are studying occupational therapy or dental hygiene, their experiences and attitudes depend on their actual current social contact with elderly individuals. Based on these results, the present article discusses the type of training and education regarding the elderly that should be provided for students.